

## 『大鳥池物語 龍神の怒 -明治19年 倉沢 伊藤』読み下し文

### 大鳥池にて難波・長南・強勢並思主御威光以龍神の怒をおためし事

伝聞、元和年中の頃、毎年三月六日と申には、櫛引郡三組の御百姓上意を蒙り獅々狩を相催し三日三夜奥山大鳥の池辺迄狩遊、十五歳より七拾才まで以上と定、勢子頭には難波・長南を先として、其勢都合六百三拾三人なり。弓・鉄砲・鎗・かまなどを持せ、貝を吹たて、太鼓をうち、その外色々の鳴物をならし、小木大木を打たたき、おめきさけんで狩入ける。

多くの獅々・猿・狐・狸をはじめとして、実類いきやふの獣共、時の声に驚騒き、退まわる。かしこの峯、是の谷へころび落、淵川かり出されし熊ども、いくらという数をしらず。八尺余・壹丈余の志々ども、おめき出、小木かんを起越もいわせず、かけまわる有様は、伝聞し寅のまき狩にも當、是にまさらんやといさみ進んで狩る事三日三夜と申たるは、大鳥池の汀に狩入ける。

まさに頃しも三月上旬の事なればこそ雪はまんまんとしてふりつむり、谷峯のへだてなくこりかたまり、只平地を走に了とならず。是はよければかしこ急追込、是にて射ころし数千の獣かなはじとや思いけん。水の中に飛込てはねいるけるさる・狐・狸にいたるまで、水にあふれ岸へふゆきあがらんとするところをゑたりや。おう云ままに、弓・鉄砲・鎗先を揃へて突殺されし。しし・猿の血流出さするに、清き池水も多ありにそなりにけり。

不思議やな。沖の満舞なかに、てんもく程の雲一村出たり。皆人怪哉云よりはやく池いつはいへんまんして、峯もみへわからず即時に波風新になりはんとふ名とふして、雷電、稲川ま夥敷雨あらねば、しゃじくを流しふり来れば、四方に我にまっくら闇なり。前後をふする不斗なり。かかる處に雲の内よりしゃりんごとくの光物貳参十飛違、鳴渡る有き雨、身の毛もよだつ斗の流石大勢の勢子なれ共、驚騒ふししづみ、いやからへにかさなりふして、肝魂も消失也。頭をあくる物なし。木の根岩のはさたけしがみつく有て、埋とぞ見へにけり。

中にも難波・長南貳人は之より強勢智謀在者なれば、少も騒々敷なく、如何様是は龍神のわざなるべしと心得、勢子の大勢へ力を付て申やふ。「いへかざなき者共の躰、今更驚べからず。鉄砲へ玉葉をつくべし。弓へ発矢を添へ持べし。我等がこえがけ次第に一度にどつどはなすべし」とそれぞれに下知すれば、勢子の者ともなきあがり、てん手に支度したり。在る兩人、沖の方へ向て弓と矢を打つかひ、大音聲をあげて申様、是元へ出たる者共はいかなる者とか思ふらん。

当領主〇も清和源氏酒井宮内太夫忠勝公之御内長南久右衛門、難波兵藏と云者也。然所秋にもなれば多の百姓等が作置田畑へ猪・猿・貉わざわひなしけるに依、君是を不便と思召、上意を蒙り、毎年しし狩をいたすなり。全我等が私用にあらず、御領内の山川万物天地共に夫わが君思主の領地ならずや。何者ぞかかる所為いわれなしそこひな龍神達と言とりはやく勢子の兼而つたまるなれば、相図の鉄砲七八十丁筒先を揃へて一度にどつと雲の中へ打いれける。山も崩る斗なり。貳三度四五度もやめずして打込てはなしければ、いか成天魔龍神も恐れ去るよもあらずとささやけば、不思議やな、今迄鳴渡りし雷も鎮、光物も消失てはれ上り事希代不思議見前たり。是偏に思主御光威之故也。

皆々〇家無よろこび我家我家にかへるちぞ。目出度けり。夫一国一城の国主は則一国の神明也と古文に見えたり。誠に有難と申也。愚か恐貴奉まべきものなり。

※〇は読み解けなかった文字